

南洋女子中高一貫校 NANYANG GIRL'S HIGH SCHOOL

教育省の説明聴取の後、まばゆいほどの陽光降り注ぐ校庭や、清潔感溢れる教室・廊下、歴史と伝統の重さを感じる図書館などを見学。実際の ICT を駆使した物理の授業なども参観させてもらった。生徒たちはメガネ、歯列矯正中である子が多かったが、自由でのびのびした印象を受けた。シンガポールでも No.1 の女子校で、初代首相の夫人も今の首相夫人もこの南洋女子



* 3R について

Reflective : 反応する

Responsive : 責任をもって

Responsible : 共感する

つまり知識や情報を選びすぎりながら、それらを鵜呑みにするのではなく判断しながら共感を得ることが大切である。

* 5 Principles of Learning について

1. Learning is Active : 活動

2. Learning is Holistic : 全体論

3. Learning requires Metacognition: メタ認知

4. Learning is Social : 社会

5. Learning is Contextual : 文脈



中高一貫校の出身であるという。二人のファーストレディーを輩出した名門校に相応しい格調高い堅牢な校舎が、行き届いた手入れでなお一層印象を強烈にしていた。



*Prototype 21 C2 Project (P21C2) について

・操作性や速度・バッテリーの持ち・重さ・価格などの点から使用機種を絞り込み、ICT を活用した授業力と学びの両側面から生徒たちを支援する方針を決めた。

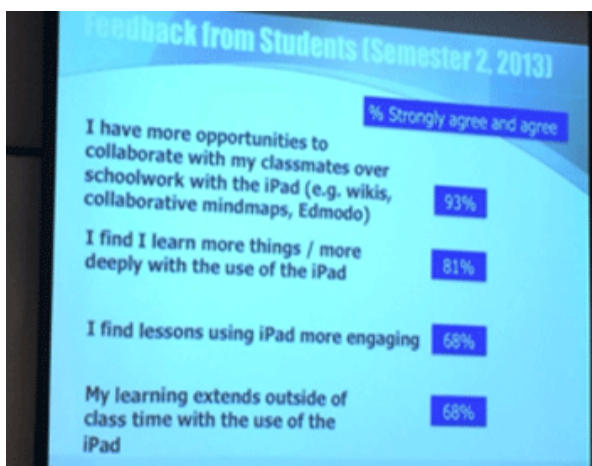
・まずは先生を育成。プロによる支援によって先生方の ICT 技術や ICT リテラシーを向上させた。全職員が ICT を身に付けた (3 年がかり)

・アプリなどの開発も進み、それによりカリキュラムを充実することが可能となり、「先生が中心」ではなく「生徒が中心」となる授業 教科書 + ノート タブレット端末：根本的な変化 (ワクワクドキドキ) を生徒に与えた

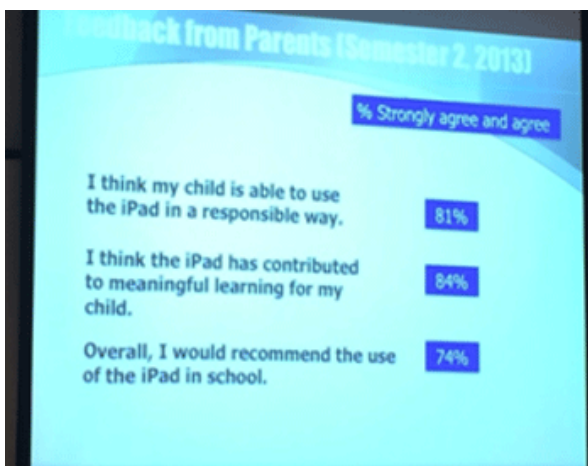
・学習はこれまで授業が終われば終わるものだったが、ICT デバイスによってスペースが広がった。

・しかしあくまで、P21C2 というものはデバイスの問題だけではなく、どのアプリを使うかという問題でもなく、教科書にとって代わるものでもなく、ましてや先生にとって代わるものでもない。

・P21C2 は学習体験そのものの向上であり、いかにして ICT 技術が効果的・効率的な教示を与えうるかということを示しており、学びの変容が生徒たちをより高めるかということにかかっている。



生徒のアンケート結果



保護者のアンケート結果

【Q&A】

Q:先生たちの ICT 技術の習得はどのようにしたのか

A:最初に ICT リテラシーの高い先生を軸に、拡げていった。また ICT 関連会社で学ぶ機会も与えた。

Q:小学校の基礎教育の場面では母国語の習得等、中高とは違った難しさもあるのではないのか。

A:基本的には同じで、カリキュラムに組み込み進めた。ただ、ナンヤンはかなりの成功例と言える。

Q:タブレット端末の保護者負担は？

A:タブレット端末の購入代金のみ負担してもらっている。その他、LAN 環境や充電ブース設置などは学校が整備。経済的に厳しい家庭には学校 OB からの寄付があり、援助できる体制がある。

Q:学費は？

A:中 1・2 年生は 200S\$ /月、 中 3・4 年生は 250S\$/月 (約 20,000 円) という廉価。これだけの設備でこれだけの教育ができるのは、国家戦略として人材育成教育に投資をしようという明確な教育省の方針があるからだ。

【キャンベラ小学校】

午後からは総児童数 1600 名、職員数 130 の公立小学校へ。1 km 徒歩圏内で通学してくる多民族の子供たちが共に学ぶ、ごく一般的な公立小学校でのフューチャースクール実例だ。

まず大変熱い、黄宝満校長先生のプレゼンテーションを伺った。デバイス（携帯電話やタブレット端末）が子供を“あやすもの”であってはならない。そのもの自身に害はないが、価値を教えて初めて役立つ。

これから獲得するであろう言語の質にも影響を与えてしまう。



デバイス選び

- ・サイズも適切で、落としても大丈夫な使いやすいものでなくてはならない。
- ・最新のものが BEST ではない
- ・6~7 歳くらいの子供は大きいものを書きたい、描きたいという欲求がある
- ・6 時間チャージしないで済むもの
- ・After-sales Support があるもの
- ・学校外で使えるもの

使用機種が決まった経緯を聞いた後まずは教室へ参観（約 30 分）

モニターで全体指導の後、グループに分かれ、個人が自分なりの工夫をしてタブレット端末で課題をこなす。この児童たちは 4 ヶ月で使えるようになったという。





- ・キャンベラ Experience に至るまで、校長は1997年に始まったマスタープラン1にかかわっていたが、シンガポールも同じく試行錯誤の時期があった。“コンピューターはあればすぐ使えばいいというものではない”。
- ・マスタープラン2からマスタープラン3ではじめて協力し合いながら、目に見えない所が大切だということを学ぶ
- ・現在、マスタープラン3の段階である。



ICT 関連会社に出向いて何が必要か、さまざま検討を行う。子供たちにはまだタブレット端末を与えていない。タブレット端末を学校が買うか、保護者が買うかなどを検討し、保護者が買うことにする。その結果はのちのち正しい方針だったことが、今まで1度も壊れた例がないことで証明された。

Cf. 経済的に買えない子には 48 S\$ (意図的に無料にはしない)

教師のスキルアップを図る

③家族で分かち合える時間をとる：家へ持ち帰らせる

保護者には1：1でタブレット端末を使うことをオリエンテーションする

先生同士が共通認識を持ち合う、保護者同士に学び合わせる

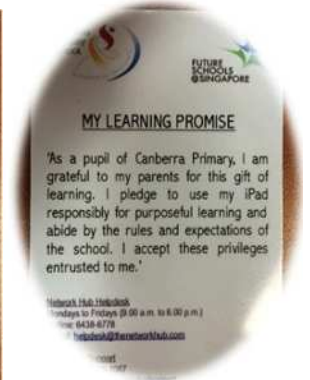
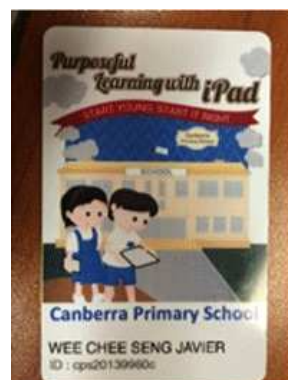
父母と子供の間で、タブレット端末は学習のために使うということ大切に使うことなど誓約をさせる。

渡し方もカードを添えて素敵なギフトバッグに入れて、子供に父母から渡す、というプロセスを踏むことが大切である。

～ に1年かけてようやく子供たち一人1台のタブレット端末を手にする。保護者もこの時点までには95%が賛同をし、喜んで子供にタブレット端末を買い与えることができるようになっている。

時間をかけて、保護者も子供もタブレット端末を大切に、タブレット端末を仲立ちに教育にも関心を寄せるようになる。

保護者に使いやすいアプリを提供する段階になる。



【感想】

南洋女子中高一貫校とキャンベラ小学校というある意味、典型的なエリート校中高一貫校と一般的な小学校を同時に視察できて幸이었다。どのような学校でも ICT 教育の「導入は可能である」という事がはっきりわかった。しかし、同時に、ICT を導入して何をするかという目標、また何のために導入するかという目的を明確に持つということの大切さも感じ取ることができた。

先のエリート校では高度な情報処理や今欧米で話題となっている「反転授業」が可能となるような域まで到達することを目標とし、国際的に通用するグローバル人材育成の武器となるツールとして考えられている。

一方で、経済格差社会にあって、そこから抜け出す、あるいは到来するであろう IT 社会での生活の基礎技術としての教育 ICT も考えられている。

ただ導入することだけを目的とすれば、子供たちには単なる便利な箱として三日で飽きられてしまう。なぜなら実際の ICT 環境のそれとは違い、教育 ICT は様々な制限が加えられた、ある意味「不完全な」「不自由な」デバイスにならざるを得ない。

割り切って限定的な使用とならざるを得ない教育 ICT とはいえ、それを十分に活用していくためには教師の側のスキルがかなり求められる。

ここをどう本市でクリアしていくのが、課題となろう。

また、財政的にも義務教育の期間中、一人一台を持続可能にしていくには相当な決断が必要である。

持たせて終わり、一年だけ配って終わりにしては大阪市の教育は物笑いの種になる。

継続的なまた、明確な目的と目標を示して初めて、全市展開を決めなくてはいけないと改めて感じた。

【リゾート・ワールド・セントーサ】

視察2日目最後は、2010年にオープンしたセントーサ島の巨大統合型リゾート（IR）「リゾート・ワールド・セントーサ」を訪れた。島とはいっても橋やケーブルカーで往来ができるが、景観上高さ制限がかかっているため、先に視察したMBSとは全く趣を異にしている。

しかもユニバーサルスタジオ・シンガポール（USS）や世界一大きい水槽を有する海洋水族館を巻き込んだ形の、49万㎡の広大な敷地を持つ。

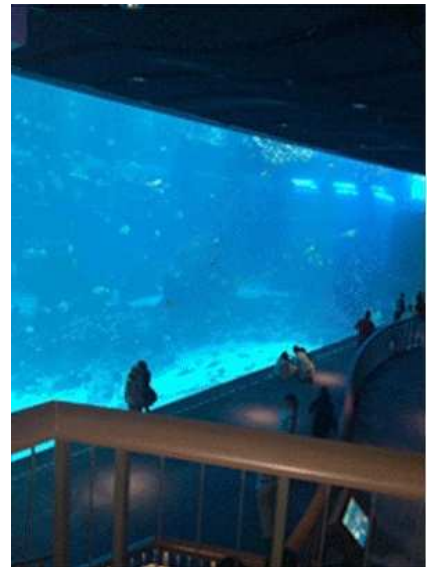


MBSでも力をいれているMICE事業の会場がここでは中心に位置し、それを取り囲む形で各種のホテルがある。世界一の水族館やウォーターフロントを上手くコンベンションルームや、ホテル、コテージにも取りこみ、他では見たことのないような空間演出や客室作りを成功させていた。遊び心満載で、どちらかと言えば、滞在型リゾートと言ってもよい盛りだくさんの仕掛けがあり、富裕層から家族連れまでが満足できるような各種のホテルや

アミューズメント施設、ショッピング・ゾーン、レストランなどがあつた。プレゼンによると、リー・シェンロン首相や他国の皇族等も来訪されるVIPゾーンもあるとのこと。

もとはイギリスの gentlemen's club である

クロックフォードが前身。小規模なカジノであるブティック・カジノだった。



【Q&A】

Q：大阪へ投資するとすれば？

A：カジノによる経済効果としては最後のチャンス。マカオのようにたくさんカジノが出来てしまうとダメで1か所にすべきだ。観光による増収効果は少なくとも4000億円。5000億は見込める。

Q：マーケットはどこにあるのか？

A：30年の経験からすれば空港を中心に3時間圏内。関西は京都・奈良・神戸など非常に魅力的な都市だ。

Q：雇用は日本現地で調達するのか？

A：70%は現地でと考えている。

Q：ディーラーは上海で研修とのことだが？

A：英語・中国語は必須。交換留学生やインターンシップなどを考えている。

Q：CEOの目から見て、日本と韓国とどちらが優位か？

A：大阪のほうが文化・歴史がある。欠けているとすれば、クリエイティブなマーケティング。これは重要。



【感想】

二つのカジノが2012年に同時オープンして日本では圧倒的にMBSの知名度が高い。ともにギャンブル依存症に対する対策や、犯罪などに対する規制を国レベルで行っている。確かに税金・経済波及効果・雇用創出などは想像以上だったが、観光資源に乏しく、意思決定も比較的容易な都市国家シンガポールであるからこそその起爆剤として機能したのではないか。既存の文化との共存共栄が図られるかどうかも課題である。

また、こうした視察に現地へ行くと、大抵は良い面しか見せられない。ましてや今回は相手が民間企業で、大阪が有力な候補地であればなおのことである。

さらには、介護・看護・建設の分野で外国人労働者受け入れの議論が国で議論になっている。このような観光・集客・娯楽の世界でも外国人労働者前提のIRであることを考えれば、単一民族国家として長い歴史のある我が国の根幹にかかわる問題として、そういった議論も当然必要になってくることだろう。

バスに乗り遅れないようにと結論を急ぐのではなく、経済の物差しで目くらましに会わないように、プラス面、マイナス面ともに反対論者・賛成論者の双方の意見をすべて詳らかにしたうえでのことだが、住民と自治体の合意形成は今後どのようにしてはかれていくのだろうか。もちろん国の法制化を見定めなければいけないが、慎重にIR議論を進めなくてはならないと改めて思った。

【シンガポール港】

帰国する日の午前中、7か所目。最後の視察先であるシンガポール港を訪れた。

■大阪港とアジア主要港との比較

	シンガポール港	上海港※2	釜山港※4	大阪港
2012年 コンテナ取扱個数 〔 〕内:世界順位 ():トランシップ率(2010年)※1	3,165万TEU 〔2位〕 (84%)	3,253万TEU 〔1位〕 (21%)	1,705万TEU 〔5位〕 (44%)	241万TEU 〔57位〕 (0%)
コンテナターミナルバース数	54	47	43	9
コンテナターミナル岸壁延長	16,000m	13,000m	13,100m	3,200m
コンテナターミナル岸壁水深	9.6～16m	9.4～17.5m	12.5～18m	13～16m
コンテナターミナル面積	600ha	456ha※3	721ha	122ha
ガントリークレーン設置数	190基	60基※3	94基	21基

(H26.1作成)

このように、比べ物にならないほどの規模にただただ唖然とするばかりであった。

取扱いコンテナ数はじめすべてにおいてである。釜山港を視察した時にも感じたことだが、いずれも外海に広く面しており、かつての「天然の良港」と呼ばれた入り組んだ海岸線が現在の海運事業にとっては、むしろ阻害要因になっている一面もある。しかし、シンガポールを筆頭として、上海・釜山などのアジア圏の海上貿易量は、アジア・北米、アジア・欧州が北米・欧州の伸びをはるかにしのいでいる。これがGDPの伸びと合致している。視察時も、入港待ちの大型コンテナ船が海洋上に無数に停泊しているさまは圧巻であった。





PSA (Port of Singapore Authority)

PSA は 1964 年にシンガポール港湾庁として、港の整備・維持管理・船舶運航管理などを一元的に担ってきた。1997 年に国際戦略的な港湾運営のため、シンガポール政府全額出資の PSA コーポレーションとして民営化。その後、PSA インターナショナルがシンガポールに本部を置く世界最大の港湾運営会社として立ち上がり、PSA コーポレーションは逆に子会社化された。

【感想】

プレゼンを聞いていて特に興味を覚えたのは無人で遠隔操作による完全自動化コンテナターミナルである。実際にバスに乗ってこの敷地内を走行するトラックとガントリークレーンを注視していたが、まだそこまでは進んでいない。いずれはということらしいが、そんなに遠い将来の事ではなさそうな光景であった。

日本では名古屋港が自動化コンテナターミナルを日本初で供用している。管理棟内の捜査室から遠隔操作で、ヤード内を往復する自動搬送台車 (AGV) を 33 台導入しているという。無人の完全自動作業を行ない、モニターで少人数のオペレーターがいるのみという先駆的な取り組みだ。建設港湾委員として議員 1 年目に視察したとき強烈な印象を持った名古屋港は、市街地から鉄道が港湾先端まで延び、コンテナの集荷・配荷を効率良くしていた。その後、数年が経つが新名神高速道路などとのアクセスも向上し、ますます港湾事業の充実をみている。

大阪港も神戸港との連携をより一層深め、阪神港としてのスケールメリットを生かしていく方向を模索するべきであると考え。内海であるビハインドをはねかえすには、思い切った入港手続きや通関手続きの簡素化と料金値下げなど、さまざまな方策が必要である。埋め立て土地利用は、まずもって港湾施設最優先で考えてこそその「戦略港湾」と呼べよう。

